

青森県十和田湖周辺地域 「ジオ」から見つめる十和田の魅力



石田美月¹, 大沼勝弥², 桑原佑典¹, 小林滯生³

1: 工学系研究科システム創成学専攻 修士課程 2年, 2: 理学部物理学科 3年, 3: 農学部環境資源科学課程フィールド科学専修 3年

1. 背景：十和田湖周辺地域の課題

青森・秋田両県にまたがる十和田湖周辺地域では、**急激な人口減少と地域社会の高齢化**が深刻な課題
(例：小中学校の統廃合、廃業する旅館の増加)

頂いた検討課題

「人口急減地域における地域コミュニティの作り方」

- ・地域を若い世代の学びの場にしたい
- ・地域外とのつながりから地域内の新たなつながりを生みたい
- ・地域の深い魅力を発掘し、訪問客の滞在周遊に繋げたい

2. 現地活動：十和田湖周辺地域の魅力の探索



主な訪問先：

- ・十和田湖・休屋地区（ガイドツアー¹）
- ・奥入瀬渓流（コケの観察会² etc.）
- ・八甲田山周辺地域（トレッキング³）
- ・旧小坂鉱山

1: 十和田湖国立公園協会主催 十和田湖観光 2: 奥入瀬自然観光資源研究会主催コケさんぽ 3: 八甲田山ガイドクラブの引率による

- 十和田湖周辺地域には固有の自然や文化や、それを育んできた「**大地＝ジオ**」の魅力が豊富に存在
(例：十和田カルデラ、奥入瀬渓流コケ群落、ヒメマス、小坂鉱山)
- 十和田火山や小坂鉱山などは、火山学や地質学の専門家からは大変注目されている存在
- しかし、これまで十和田湖周辺地域における「**大地＝ジオ**」については**地元ではあまり注目・活用されてこなかった**
・「ジオ」にフォーカスした観光産業・見学施設の未整備
・十和田市の地域教材（例：「わたしたちの十和田」）に地学関連の記載がない

十和田湖周辺地域の「**ジオの魅力**」を活用することで、「**地域おこし**」につなげることはできないか？

3. 情報収集：「ジオの魅力」の活用法

学会（JpGU・日本地質学会）にて地学教育の専門家や日本各地のジオパーク関係者と意見交換



「ジオ」の活用のカギは...

- 子供たちへの「わかる」地学教育
(例：実験教室・野外観察会)
- 地域住民と研究者コミュニティの交流
(例：学会開催・アウトリーチ巡検)

実践！

アウトリーチ・教育

研究者の受け入れ・研究協力

研究者

地域住民

4. 実践：十和田市立第一中学校での交流授業「十和田湖・奥入瀬渓流の成り立ち」

十和田湖周辺の大地の営みを**手軽な実験**を交え解説

対象：十和田市立第一中学校 1年生（計14名）
日時：2019年11月12日（火）13:00~15:00

チョコレートを用いた火山実験は大変好評！



交流授業の反響：生徒らへのアンケート結果

- これまでに十和田湖と奥入瀬渓流のでき方について知っていたか？
十和田湖：聞いたことはあったが詳しくは知らなかった（14人全員）
奥入瀬渓流：聞いたことはなかった（2人）
- もっと知りたいと思ったことは？
「青森の自然」「十和田湖が噴火した時に出来た石の性質」「他のカルデラの性質やでき方、十和田湖との違い」
「**ジオ**」に興味を持ち、さらなる関心を広げる生徒も存在！

授業を終えて、興味を持ったものはあったか？



交流授業により実証されたこと

- 十和田湖周辺地域の「**ジオ**」は、**若い世代の学びの場**としてのポテンシャルを持つ
- 感性豊かな若い世代が、**地元の「ジオの魅力」**に興味を持つことの重要性和、そのための「**わかる**」地学教育の有効性

5. 地域への提案・今後の展望：「ジオ」を活用した地域活性化シナリオ

地域の「**ジオ**」に対する住民の関心の醸成・研究者との関係構築

「**ジオツーリズム**」の展開・ジオパーク登録へ向けた活動

観光客・研究者の誘致、十和田湖周辺地域への**経済効果・雇用の創出**

提案1：親子実験教室の開催

- 手軽な実験を通じて地域内外の子どもたち・親たちの「**ジオ**」への関心を喚起
- 学校の外での地学教育の場



提案2：地震火山こどもサマースクールの開催

- 子どもたちが第一線の研究者と交流する機会
- サマースクールの受け入れによる経済効果
- **地域住民と研究者の「つながり」**を作る場

青森県では実施例なし！

現地報告会

(2020年2月13日、十和田湖ビジターセンター)

学生の報告の印象 学生の報告を十和田湖の地域活性化に生かしたいか？



現地住民のコメント

「これまでになかった取り組みの報告よかった」「**気づきのチャンス**をありがとう」「(市役所など)もっと多くの人に聞いてもらいたい」「**ジオ**に目を向けて発信していきます」

山形県鶴岡市

リーダー 文科一類2年 相田 健志
経済学部4年 前川 拓実

当地域の活動テーマと活動方針

概要

- ・元々与えられたテーマは「フルーツランドを核とする鶴岡市御引地域の振興」
- ・少子高齢化による地域人口減少、訪日インバウンドといった社会背景から観光に注目



鶴岡市全体の観光振興と、その一部分としての御引地域の振興という2段階で話を進める

そもそも観光の位置づけについて

観光をただ単に地域に人を呼んでお金を落としてもらおうという浅ましいモノとお考えであるならばそれは大きな間違い



観光は地域の生活環境を同時に整備していくモノであり、その豊かな環境を支えていくためのコストの一部を他地域から来た人に負担してもらう事



近江商人の「三方よし」(「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」)の考え
単純な売買のみを超えて公共的な利益を生むことで、恒久的な拡大再生産の道を拓いていく

鶴岡ツーリズムの理想像

鶴岡ツーリズムの理想像

- ・鶴岡のイメージを確立する(出羽三山?)
- ・鶴岡を通過するのではなく、鶴岡を起点に庄内エリアを周遊してもらう
- ・観光という第3次産業だけでなく、1次産業・2次産業と複合的に発展
- ・鶴岡に住む人が主体となって、コミュニケーションをとりながら発展させる

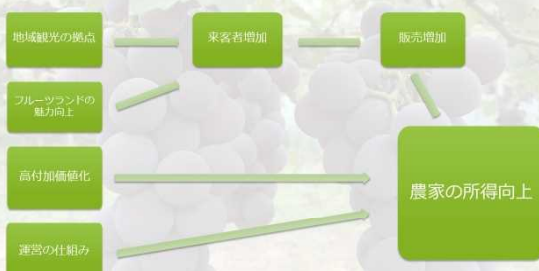
鶴岡ツーリズムの理想像

鶴岡ツーリズムの本当の理想像とは、

- ・地域づくりに前向きな人材の拡充
- ・人材間のコミュニケーションの活発化

の2点を通して、鶴岡ツーリズムを、鶴岡の地域自体を今よりももっと鶴岡の方たちで創り上げること

フルーツランド計画に関して



フルーツランド計画に求められる役割

2つの視点

- ① 農業の視点
果樹農家の担い手育成
農家の所得向上
- ② 観光の視点
地域観光の拠点
観光客を誘致できるような魅力
- ③ 地域住民の視点
地元住民から愛される施設

東大FS 山形県高畠町担当

東京大学教養学部	3年	塘内彩月
東京大学教養学部	3年	佐々木竜太郎
東京大学教養学部	1年	小野悠貴

高畠町から最初に与えられた課題は、地域の高品質な農産物やその加工品の、ブランド発信の戦略だった。しかし、実際に町を訪れて、既にある町の魅力に地元の人、特に若者が気づくことが、地域の未来にとって最も大事なことでありと確信し、商品の宣伝戦略を超えて、三者それぞれが、地域と、そこに住む若者との、良い関係の結び方を考えた。

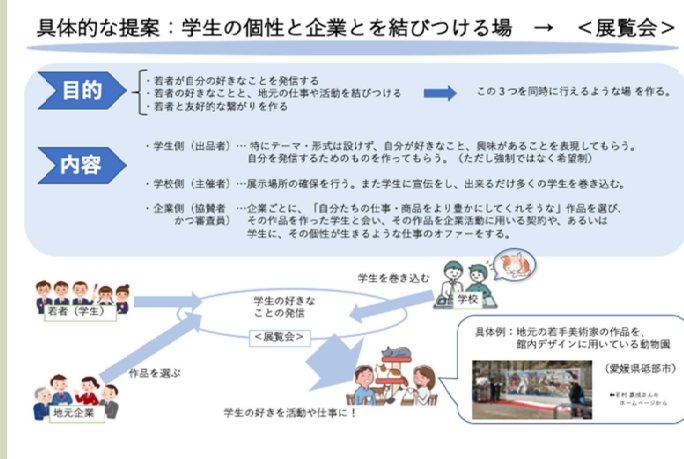
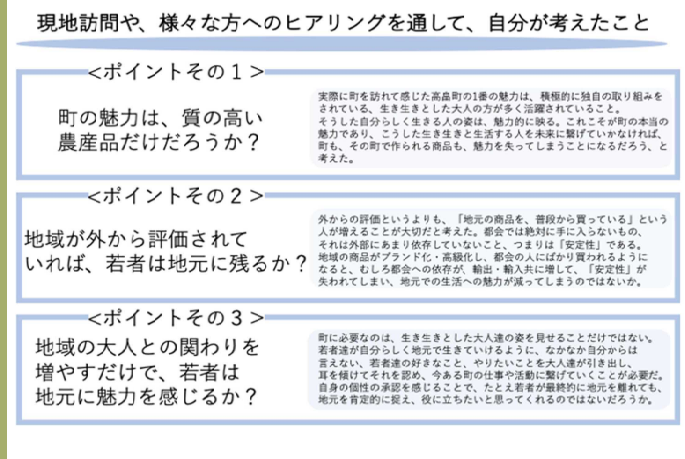
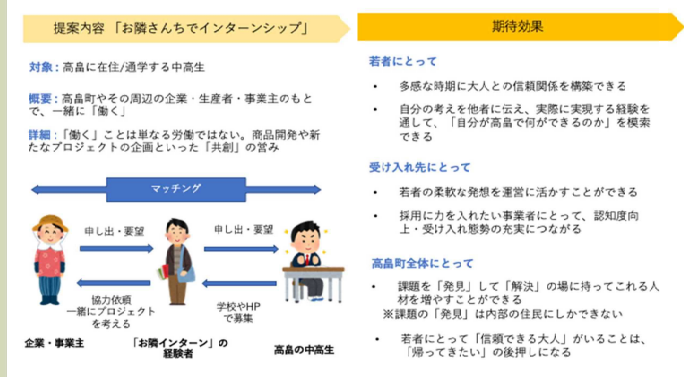


課題の分析と目標

具体的な提案

佐々木案

小野案



子供たちに「したい」を知ってもらう



具体的な方法



石川県 能登町チーム

持続可能な里山集落づくり

加藤 圭、雉間 憲秀

活動の舞台

能登町山口地区について

山口地区は平成27年度の国勢調査において人口103人、世帯数37世帯の集落である。近年の高齢化に伴う離農者の増加により、耕作放棄地の増加が問題となり、十年前からこうした田んぼを集落全世界で管理する「**共同田**」の取り組みが開始された。現時点で集落全体での田んぼ面積が約16町歩であるのに対し、共同田の面積は約2.5町歩とおおよそ1/6程度になっている。



10年で40人の人口減！
このままいくと
30年後に集落は消滅.....？

現地・東京での活動内容

現地活動では、集落での農作業体験・ヒアリング等の活動を通じて、集落の抱える課題を一つ一つ明確化し、把握することで、道筋提案につなげていくことを目的とし、次のような活動を行なった。

- ・ 集落内15名・集落外4名の方へのヒアリング
- ・ 稲架立てや稲刈り、収穫祭などの共同田行事への参加
- ・ 近隣地区に立地し、山口集落から通学している児童も在籍する松波小学校にて、小学校六年生の児童たちと交流
- ・ 集落内外の20代、30代の方々7名と「若者会議」を一年間を通じて実施

また、東京でも集落運営に関わる情報の収集、および外部への情報発信のために次のような活動を行なった。

- ・ 集落自治を研究されている先生への聞き取り
- ・ FSでの活動を発信するブログの運営



課題と提案

提案① 負担軽減

共同田行事の継続には、幅広い年齢層の積極的な参加が欠かせない。しかしながら、現時点では共同田行事に**積極的な動機**を持って参加している人は残念ながら多くない。

	見える	見えない
やりたい！ (能動的)	・ お金・対価	・ 交流の場・一体感 ・ 年配の方の活躍の場
しゃーなし… (受動的)	・ 耕作放棄地を出さない ・ 一軒一人という慣習	・ (作業をしてくださる) 年配の方への敬意 ・ 付き合い、義務感 ・ 継承したいという思い

また、将来的には担い手の減少と対象となる田んぼの増加により一人当たりの負担はさらに増加することが見込まれる。負担感が大きくなりすぎる前に、**行事の規模の再検討**と、**行事を休んでもいいという考え方を普及**させることが重要であると考えられる。

提案② 若者の行事参加率向上

集落の暮らしの持続という観点で、もう一つ問題視されるのが若者の行事参加率の低さである。平成27年度の国勢調査でも、山口集落には少なくない数の若者（20代-40代）が暮らしているが、多くの場合で集落外に職場を持ち、集落には**寝るためだけに帰ってくる**という状況が見られている。このような状況では**集落の若者同士のつながり**や、**若者の集落への愛着**は生まれにくいだろう。



この状況を改善するために、僕たちと若者会議のメンバーで立ち上げたのが「**山口若者会**」である。20代、30代の若者7名で構成され、今後集落の他の若者たちにも声をかけていくことを考えている。若者会は、日程の束縛が大きく（仕事との兼ね合いが難しい）、心理的なハードルも高い共同田の農業行事ではなく、「**祭りの運営**」を中心に活動していく方針である。祭りは集落のアイデンティティを構成する重要な要素の一つであり、その運営は**若者が集落全体と関われる機会**を定期的に生み出してくれるだろう。

石川県能美市

◆担当大学生◆

教育学部4年 村岡 優太郎
教養学部2年 川瀬 翔子

◆ミッション◆

中山間地域における地域資源の国造ゆず等農産物を活かした地域内外在住者の縁づくり推進に係る具体的施策の提案

能美市といえば...?

- *産業九谷焼の発祥地!
- *全国住みよさランキング8位入賞!
- *特産農産物「加賀の丸いも」、
「国造ゆず」が県内外で人気!
- *市のイメージキャラクター、
ゆず美ん & ひば能んが活躍中!



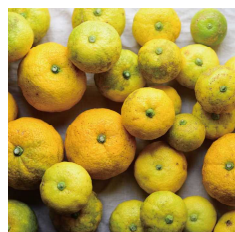
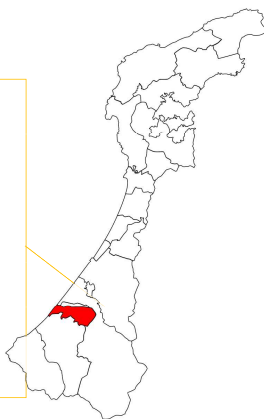
その中でも、活動地域は...

石川県能美市国造地区

中山間地域にあり、古くからの
小規模7集落と、平成に入り
造成された大規模住宅団地から
なる地域。

そして、

国造ゆずの生産地。



昭和61年(1986年)に栽培開始。
⇒35年間無農薬・有機肥料栽培!

☆品種:

- ・一般的な「木頭(きとう)」
- ・小さめで種がほとんどない
「多田錦(ただにしき)」

活動日程

7月
第1回現地訪問

- ・国造ゆず関係者との顔合わせ
- ・岡元農場、菜園生活風来など、能美市の農家を訪問【写真1,2】



【写真1】
能美市の特産農産部、
加賀丸いも生産農家の
岡元農場を訪問し、
加賀丸いも生産現場
を見学。



【写真2】
有機野菜を栽培して
いる菜園生活風来を
訪問。六次産業化の
一環として野菜から
ピクルスを作り、販
売している。



ピクルスを使った
ドリンク

9月
第2回現地訪問

- ・地域を巻き込んで青ゆずの活用方法の模索(親子で柚子胡椒づくり)【写真3,4】
- ・国造ゆず生産農家のお母さん方にゆず味噌レシピを聞き取り



【写真3】
能美市内の唐辛子農家
さんに協力していただ
き、親子で無農薬唐辛
子の摘み取り体験。



【写真4】
国造ゆず畑での青ゆず収穫体
験。その後、自分たちで漬
った青ゆずと青唐辛子を活用し
て柚子胡椒作りを体験。

11月
第3回現地訪問

- ・ゆず祭りにて、聞き取ったゆず味噌のレシピを再現して味を紹介【写真5,6】
- ・地元の小学校にて、国造ゆずの魅力について授業を実施【写真7】



【写真5】
国造ゆず生産農家のお母さん方へ
の聞き取りをもとに、2種類のゆず
味噌を作成し、ゆず祭りにて提供。



【写真7】
国造ゆずの魅力について、小学校で授業。
無農薬とは?比較してわかる価値がある!

11月
駒場祭企画

- ・能美市の魅力を届けるべく、東京大学駒場祭にて、ゆず味噌と能美市産の
無農薬米を紹介。

3月

- ・現地報告会
- ・学内報告会(スライド・ポスター発表)

現状分析

目 能美市の農作物に関する現状

現状分析 施策提案 将来展望

■米・大麦・大豆の生産が全体としては多い。

■個人農家が強い。

ex)岡元農場・九けもど農場・菜園生活風来

■旧3町それぞれに特徴的な農作物がある。

ex)根上…加賀丸いも 寺井…ハトムギ 辰口…国造ゆず

■有機農業をやっている農家が比較的多い。

個人農家を中心に、まんべんなく力強い農業

目 「推し」の農作物の必要性

現状分析 施策提案 将来展望

■ひば能ん、ゆず美んはいるが、加賀丸いもや国造ゆずを特段推したいという方針はない。

■団体が一つになるには「ワンイシュー」であることが必要。

■「ゆずはパッと分かりやすい」「食いつきがいい」。

■国造ゆずは無農薬栽培35年を誇り、有機栽培農家の多い能美市にとってのシンボリック的存在となりうる。

■祭りイベントがすでに存在する農作物は国造ゆずのみ。

国造ゆずに一旦注目して考える

目 国造ゆずに関する現状(まとめ)

現状分析 施策提案 将来展望

生産者

後継者不足・生産組織の複雑さ

阿部さん

地域おこし協力隊に次ぐ役割を早急に考える必要性

地域内

潜在的な協力姿勢を取り逃がしている可能性

地域外

地域外からの関心の高まり/窓口が不明確

生産組織の一本化が必要?

施策提案

目 施策提案

現状分析 施策提案 将来展望

地域に根差している阿部さんが
生産組織を一本化し、
複雑になっている窓口や
取り逃がしている協力姿勢を受け取る
受け皿となることが理想。



阿部さんの組織構築に向けた具体的道しるべを提案

目 道しるべ①: 2019年度中にとすること

現状分析 施策提案 将来展望

■写真共有

2019年度に一緒に活動をした人たちに声をかけ、資料用写真を収集。
Googleフォトや iCloudの共有アルバム機能を利用し、活動ごとに
グループを形成。のちの「協力者リスト」としても役立てる。

■ポートフォリオ作成

2019年度に行った活動について、収集した写真をもとに
活動ポートフォリオを作成。写真に簡単に説明をつける程度。

■説明資料の作成

「国造ゆずとは?」「加工品ラインナップは?」といった、基本的な
国造ゆずに関する情報を整理する。どこまで認知しているのかを明示する。

今年度の活動振り返り・情報整理

目 道しるべ②: 2020年度年間計画

現状分析 施策提案 将来展望

4月

資料作成

- ・組織立ち上げ時に必要な基本情報を整理し、資料としてまとめる。
- ・組織準備や関係先調整時のプレゼン資料を作成する。

5-6月

組織準備

- ・2021年度の組織立ち上げに向け、利用できる制度を確認。
- ・ツアー等で必要なスタッフの人数等も概算。次の関係先調整の訪問数の指標とする。

7-11月

関係先調整

- ・2021年度4月から稼働できるように、関係先にアがり。
- ・地域外の大学への訪問や地域の小中学校、地域住民への参加意思表示の確認。

12月

ツアー実施

- ・2019年度のモニターツアー等を参考にツアーの実施案を作成。
- ・開花期、摘果期、収穫期の3期に分け、表年と裏年を考慮した5パターンを準備。

将来展望

目 展望①: 五カ年計画

現状分析 施策提案 将来展望

2019	2020	2021	2022	2023
表年	裏年	表年	裏年	表年
阿部さん 地域おこし協力隊				
資料作成				
	組織設立準備	組織運営		
	関係先調整	摘果・収穫・運送補助		
奥主催ツアー・講座 モニターツアー開催	ツアー案作成	ツアー実施		

目 展望②: 3 地域共同の土産開発

現状分析 施策提案 将来展望

根上	寺井	辰口
↓	↓	↓
加賀丸いも	ハトムギ	国造ゆず

旧3町の特徴ある農産物を活かした土産品の開発へ



一年間ありがとうございました!

1 福井県あわら市 概要

福井県の最北端の市
石川県加賀市に隣接
あわら温泉を軸に、「あぁ、あわら贅沢。」をスローガンとした観光戦略
2023年の北陸新幹線延伸により新幹線の駅が新設吉崎地区



3 吉崎地区

・人口約300人・約半数が高齢者のみの世帯



▶ 蓮如さん

浄土真宗の蓮如上人が布教の地として選び、一大宗教都市を築いた。全国から参拝客が訪れる。吉崎御坊跡（御山）は国指定文化財であり、蓮如上人像や史跡が残る。

▶ 県境

石川県加賀市吉崎との県境が、1つの集落の中を貫いている。地域の方の生活圏は、加賀方面とあわら市中心部方面に二分される。

2 活動内容

地区	内容
吉崎	ヒアリング調査・周辺地域視察・地域イベントへの参加・県及び市の担当職員の方々の訪問
波松	カフェ及び農業体験・ヒアリング調査・子供達との交流
吉崎 波松	ヒアリング調査・中間報告 地域の方との意見交換会
吉崎 波松	最終報告



3-1 現状と課題

地域内に充実した買い物拠点がなく、高齢でも自分で運転する人が多い

今ある公共交通機関は、慣れると便利だが、不満や要望も溜まっている

仏教の信者数の減少に伴い、吉崎への観光客数も減少

一般社団法人「蓮如の里 吉崎」が発足
まち歩きイベントを開催中

関係者による吉崎連絡会議が発足

地域住民、行政、関係寺院等での連携が不足

小学校休校に伴い、地域内で子供の遊び場・つながりが減少

地域住民の地域活性化への期待値が低く、若者も少ないため活動の担い手が不足

3-2 提案の方向性

北陸新幹線延伸を利用し、観光や生活に活かさないか

ステップ1

- あわら温泉と加賀温泉を電車以外でつなぐ必要
→バスやデマンド等の公共交通機関を充実



ステップ2

- 福井と石川の交通機関の中継地として吉崎に立ち寄ってもらう



ステップ3

- バスやデマンドがより便利になることで、より不自由なく吉崎の外へ出かけられる



3-3 提案：観光面

- (1)七不思議をめぐる街歩き
地域に伝わる七不思議（昔話）をモチーフにしたまち歩きルートの作成

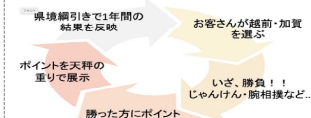
例えば…
蓮如上人を道案内したとされる鹿の案内パネル

(2)報恩講料理

まち歩きイベントで提供されている「報恩講料理」を完全予約制で週末に提供するプランを作成



- (3)みんなで県境綱引き
特徴的な県境を活かした施設を活用し、イベントを拡大



3-4 提案：生活面

1. 公共交通機関の登録予約方法のレクチャー・登録会の開催
2. 無料乗車券の配布により、慣れてもらう
3. 行政と各地域の自治体構成員を交えた最適な乗車地および運転ルートの話し合い
4. アンケートの実施および各自治体構成員によるフィードバック
5. 台車の配置などで自宅までの移動の負担軽減を

波松地区

- ・人口約620人
- ・約30%が高齢者のみの世帯

提案の方向性① 観光客に対して

波松小学校・なみまちカフェを中心とした、観光パッケージ作りをしたい

ステップ1

- なみまちカフェの広報により、「波松小学校」の校舎活用が行われていることを知ってもらう

ステップ2

- なみまちカフェを訪れた人、訪れようとする人に向けて、+αの体験プランを提示する
→特に、カフェでの待ち時間

ステップ3

- カフェ+αの体験をしてもらい、小学校を中心に波松でさらに充実した時間を過ごしてもらう

提案の方向性② 地域の方に対して

地域の方が楽しむ＆参加する 場面をもっと増やす

第2の小学校として

- それぞれの学校から帰ってきた子供達が、勉強したり

お客さんとして

- なみまちカフェや波松小学校に来る目的を増やし、より

運営側として

- なみまちカフェや波松小学校の運営に関わる機

提案

プラン一覧

- ① 釣り具レンタル
- ② 梨狩り
- ③ 写真コンテスト

カフェから外に出て、波松のすべてを楽しんでもらう

- ④ Book café
- ⑤ 給食メニュー
- ⑥ 料理教室

なみまちカフェの魅力をさらにアップし、今までにない新しい目的で過ごしてもらう

- ⑦ 波松の芋ハンコ
- ⑧ 野菜染め物
- ⑨ 展示：懐かしの遊び
- ⑩ 遊び道具

・カフェの待ち時間も、楽しむ時間に変える
・地域の子供達の放課後の遊び場として

福井県南越前町 「流動創生」事業の今後

人文社会系研究科修士1年 平岩渉
公共政策大学院修士2年 二川慎之介
理学部3年 廣木颯太郎

町の紹介・今回の課題

南越前町の紹介

近畿と北陸の間の交通の要衝。内陸部は豪雪地帯。
北陸道の宿場町今庄、花はすが有名な南条、
北前船で栄えた河野の3町村の合併で2005年に誕生。

人口:10,447人 ※減少傾向



流動創生とは



目的: 東京一極集中や地方の過疎化の間の障壁を小さくする。
⇒多拠点生活や関係人口の推進を目指す。
⇒町の移住事業の一環として2015年より実施。

- ・StopOver...地域の暮らしや仕事に加わり、関係人口を体験する。
- ・RoundTrip...町外での活動を見学し、自ら多拠点生活を実感する。
- ・CrossOver...地方に関わりたい都会の人と語らうイベント。東京で行う。

今回のテーマ

事業の見直しが必要な来年度に向けて、何が事業の課題なのか...?
一緒に考えてほしい!

流動創生事業の評価及び発展的な提案

現地活動の報告

1回目 StopOverへの参加 (8月中旬)

農家の手伝い
盆踊り大会の手伝い
参加者同士の交流

地域での暮らしや
多拠点生活を体験。



2回目 ヒアリング調査の実施 (9月上旬)

事業の関係者/役場職員/町民
に流動創生について意見を伺う。

町民参加のまちみらいトークに
参加&アンケートを実施。



3回目 RoundTripへの参加 (9月中旬)

奈良県大淀町のゲストハウスと
鳥取県大山町のシェアオフィスを訪問。

各地で活躍する若手と懇談。



4回目 現地報告会 (2月下旬)

これまでの現地活動で得た情報から
今後の事業への提案を報告。
町職員や町民合わせて50人が参加。



見えた課題

～ヒアリング調査の結果～

流動創生の参加者

- ・暮らしを肌で感じられる!
- ・自分の生き方や暮らし方を考え直せる!

受け入れる町民の方
・若い人々から刺激を受ける!
・地元を客観視できる!
・地元にはないアイデアや能力を持ち込んでくれる!

肯定的

否定的

町役場
・移住が進んでいない

事業を担う方々
・事業を継続していけるのか
・資金が不足しないのか

解決すべき課題の設定

- ✓移住者が増えない
- ✓運営者の不足
- ✓運営資金の不足

提案の前提条件

- ✓町の事業として進めること

課題① 移住者が増えない...

なぜ移住者が増えないのか...?

役場側:
事業主(地域おこし協力隊):

「移住者の増加」を目指す。
「関係人口の増加」を目指す。

これまでの活動の良さを残しつつ、
移住にも重点を置いたイベントを盛り込む。

流動創生が果たす役割...移住の材料提供をする場

移住事業そのものではない!



流動創生が
担うべき範囲
("移住の下地")

事業の評価方法の見直し...単純に数だけ見ない。

・定住率の調査

移住者の数

移住者の質

・行事への参加具合を調査
・本人や町民の意識を調査

質の判断基準

町の暮らしに馴染めているか。

行事に参加しやすくなる
既存住民とも仲良くやっていける

互に関係しあっている+両方の視点が必要

具体的な活動内容...今までの内容を充実

1. StopOverに移住について考える活動を追加。
例: 空き家巡り&宿泊ツアー、移住者とのトーク
2. CrossOverで都会に暮らす人と主体的に交流。
町で待つだけではなく、自らが赴くことが重要。
地元の潜在能力は、外部の人が発見する、という考え。

課題② 運営者が足りない...

町民の方々へのアンケートや取材⇒「環境が整っていれば協力したい」との声が想像以上に多かった。

住民や役場OB/OG+新たな移住者に運営を協力してもらう。



問題点① 町民と移住者の間の心理的障壁

移住者が事前にStopOverに参加することで、仲良くなれる!

⇒流動創生が果たすもう一つの役割



問題点② 運営の参加率による情報量の差⇒運営意欲の低下

現地活動で内部での情報共有の不足を感じた。

⇒幅広い年齢層に対応した共有方法の模索(回覧板、SNS...?)

課題③ 資金が足りない...

今までは、参加費を原則徴収せず。

参加者から活動費を徴収する。

～お金を払う意味～



✗ 搾取する

○ 積極的に知見を得ようという
モチベーションをつくる

運営側: より良いサービスを行おうというやる気の向上につながる。

参加者側: 積極的に取り組んでくれる。

一方的なサービスの提供ではなく、

互いに事業の質を高められる。

まとめ

流動創生事業への
私たちからの提案

- ✓移住を含めた内容の充実
- ✓広い範囲で運営者を確保
- ✓活動費の徴収

謝辞

今回の活動では、南越前町の武長様、宇野様、荒木様をはじめ、多くの方にお世話になりました。
また、学生支援課にも多大なご支援をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

長野県長野市信州・創造ラボを起点に
これからの公共空間のあり方とコミュニティの創出

図書館の見学、古本販売業者「バリューブックス」への訪問、本の回収
図書館の今後を話す会議への参加、本をテーマにしたフリーマーケットの見学
利用者の大学生・デザイナーへのインタビュー、館長などと話し合い
ラボの使用状況の観察とイメージマップの作成

「Alps Book Cafe」ブックフェア
への参加



善光寺界隈のリノベーションした街づくりの視察



「図書館でつながる・図書館を核とした街づくり」交流会



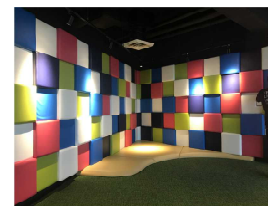
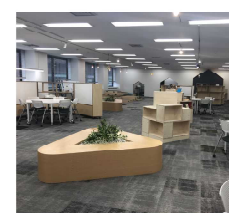
「バリューブックス」への訪問



本棚の作成



図書館への見学とイメージマップの作成



ここは使用頻度が低い、子供達の使用方は面白いので、少し家具を用意したいと思う。



邊

三重県尾鷲市 「漁村から考えるパーマカルチャー」

東京大学前期教養学部文科三類1年 松島かれん

1年間の活動日程

5月～9月：文献に基づく事前調査@大学や自宅
9月：現地訪問@尾鷲・三木浦
10月～11月：現地活動のまとめ@大学や自宅
11月：現地訪問(三木浦秋祭り)@三木浦
12月～2月：文献調査・政策立案@大学や自宅
2月：現地訪問@尾鷲・三木浦・紀北

パーマカルチャーとは…？

持続可能な農業、ないしは文化を表す言葉。Permanent (agri)cultureをくっつけた造語。「循環」「持続可能」がキーワード。パーマカルチャーの倫理の三つの原理として、地球への配慮・人々への配慮・余剰の分かち合い、消費と再生産に対する限度の設定が掲げられている。

活動前の1年間の目標

- ・三重県尾鷲市三木浦町の「平見」という地区にパーマカルチャーを導入、同時に、町内において、パーマカルチャーへの認知を深める
- ・平見にある建造物を避難所として活用(平見地区が高台に位置するため)、平時は避難所をコミュニティの中心とする
- ・三木浦町をパーマカルチャーにおける先進地とする基盤を作る

1年間活動し、導き出した結論

- ・パーマカルチャーの平見への導入を検討した際、深刻な獣害に直面し、1年間でその獣害の被害を最小限に留めた上で、被害以上のメリットを創出することは非常に難しい。よって、パーマカルチャーの「文化」面に着目。
- ・避難所という観点から、防災に着目した政策提案を行う。
- ・三木浦町をパーマカルチャーの先進地にするには？1年間担当し、見出した町の魅力から考えた政策提案を行う。

政策提案

①三木浦町に存在するパーマカルチャーの認知

平見地区への農業面におけるパーマカルチャー導入は見送ったが、そもそもパーマカルチャーとは何か、根本に立ち返ると、三木浦町に「文化」として存在していることに気付く。「循環」「持続可能」が見られる文化の存在。上記パーマカルチャーの倫理の三つの原理を満たしていると考えられる。

ex) ほうきが壊れた時、新しく「買う」のではなく、「修理して」利用 / 魚を釣り、余った場合、ご近所の方に渡したり干物にする

さらに、パーマカルチャーの創始者デビッド・ホルムグレンは「自然が先生」とし、三木浦町での滞在を通して自身が自然から多くを学んだことを踏まえると、本側面でもパーマカルチャーとの関連があると言える。

ex) 時間や天候により刻々と変化する海と空 / 海中に存在している多様な生物 / 息を呑むような満天の星空 / 多様な植物や動物の存在する山 / 平坦ではない山道を歩く

→以上から、パーマカルチャーの観点において「文化」「自然」を主軸に据えた教育プログラムの創生が可能と提案する。

②避難所としての活用→「防災」面での政策：三木浦秋祭りの継承

平見にある建造物を平時から利用し、かつ、災害時避難所として活用する予定であったが、平見へと続く道が非常に険しく長いことから、平時での利用は厳しいという結論に達した。では、避難所の活用の根底にある「防災」面での課題をいかに解決したら良いか、熟考した。三木浦町に既存のものを辿った時、「三木浦秋祭り」に帰着した。様々な文献を読んでいた際、地域とお祭りに接点があることを学び、実際にお祭りが防災に用いられている地域があることを知った。実際に三木浦町のお祭りである、「三木浦秋祭り」に参加し、三木浦秋祭りに包含される特徴を整理した時、防災と密接に関わっていると感じ、三木浦秋祭りの継承を政策として提案する。

ex) ・提灯行列と呼ばれる、夜に提灯を持ち、住民の方が町内を練り歩くイベントは、災害発生時の避難経路把握に帰着しうるというも、子供からご高齢の方まで参加し、住民間での意見交換が円滑に執り行われ、地域の各所の特性等の把握へ繋がる更に、夜行われるため、視界が悪い中で災害が発生した時の避難訓練となりうる

・三木浦秋祭りの間、多様な業務が分担され、各々がそれぞれの任務を担う。それは、災害発生時、避難所などにおける円滑な役割分担・組織運営へと繋がりうる
など、三木浦秋祭りは多様な機能を果たしているという結論に帰着した。

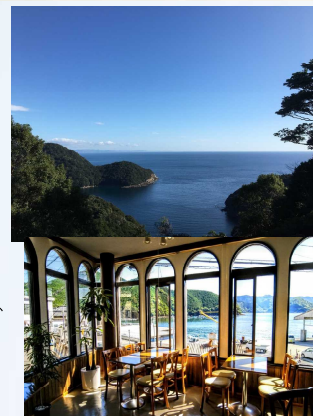
③休校中の三木小学校活用プロジェクト

①で提案した教育プログラムを具現化するプロジェクトとして、休校したばかりの三木小学校の活用を提案する。休校して間もなく、使用が容易である現在だからこそ、提案させていただきたい。先述の三木浦町の特性を生かした、「パーマカルチャー」に関連したイベントの企画、尾鷲市まで行かなくとも(三木浦町から尾鷲市街まで車で20～30分)図書館に行けるよう図書室の建設、映画を上映できる教室(町内・市内に映画館がない)など、「休校」なため、全てリムーバブルなイベントを企画し実施する。住民の方がこれをして、と思った時、いつでも企画者となれることを目標に、町内の子どもたちからご高齢の方まで、幅広い年代層の需要に応える施設として利用したく、更にそれを機に町外からも訪問客が生じることが理想。そのサイクルによって、町全体の活気を更に増加させ、子どもが増えて、三木小学校が復活する、それを長い目標としたプロジェクトである。子どもからご高齢の方まで、住民の皆様が、時に日常の中に溶け込んだ「非日常」を味わえることを目的とした政策である。

最後に

1年間、三重県尾鷲市を担当させていただき、沢山の方々と交流する中で非常に多くのことを教えて頂いた。住民の皆様の温かさに包まれ、「優しさ」を教えて頂いた。自身の未熟さを常に感じ続けていたが、同時に自身が大きく変化したことを感じ、今後も自分に何ができるのか、試行錯誤しながら三木浦町に携わらせていただきたいと思っていた。尾鷲市に戻ったら、皆様に会える、そして、尾鷲市三木浦町の海、山、星空を見たら、どれほど乗り越えるのが難しい困難にぶつかろうとも

挑戦を重ねていけるようにと思え、1年間の活動前と比較し、自身の「限界」が大きく広がり、どのようなことにも立ち向かえるようになったと感じている。1年間という任期は終了したが、私の尾鷲市での活動は終わらない。これから先、より深く、そして長く皆様と交流し、尾鷲市を第二の故郷として、自身の軸にしていきたい。三鬼早織様、住民の皆様、県庁・市役所の方々、地域おこし協力隊の方々、尾鷲高校の皆様。そして支えてくださった東京大学学生支援課の皆様、池亀先生。本プログラムを通じ、出会った全ての皆様に心よりお礼申し上げます。1年間ありがとうございました。見えるものだけではなく、教えて頂いた、目には見えない感情や感覚を大切に今後も微力ながら活動させていただきます。



道行竈の挑戦

人口38人の平家末裔の集落
生き残りをかけた闘い

公共政策大学院修士1年 大山雄太郎
前期教養学部文科2類2年 岡崎暁帆

1. フィールドの概要

《基礎情報》

三重県南伊勢町道行竈（みちゆくがま）区
・人口：38人（※うち常住31人）
・高齢化率：60%以上
・平家の落人が開いた「八カ竈（はっかかま）」の一つ

すでに動いているプロジェクト

《日本酒プロジェクト》

・2018年12月～南伊勢町と皇學館大学との包括連携により動き出す。
・耕作放棄地を活用した酒米「神の穂」を栽培し、日本酒醸造委託・販売する（純米大吟醸「道行竈」発売※右図参照）
・区長や元区長、有志の住民やメンバー等から構成される「チーム道行竈」が中心となって行っている。
・日本酒造りだけでなく、田んぼを守る・集まる場をつくる集落の【活性化プロジェクト】を目指す。



2. 現地活動の概要

《日程》

- ①現地活動：9月1日～20日
- ②再訪問：12月21日・22日
- ③最終報告会：2月29日～3月1日

《目的》

- 現地に住む住民がいかに考え生きているのか、現地に住みながら感じ聞き取り言語化すること。
- プロジェクトのアクターではなく「触媒」としての役割を担うことで、道行竈の復活・活性化の手助けをすること。

《主な活動》

- ・親睦会やお茶会（報告会）の開催
- ・出会い作業に参加（草刈り・ゴミ拾い）
- ・酒米の田んぼを耕すお手伝い
- ・老人会のサロン、体操に参加
- ・井戸端会議、戸別訪問などで住民から話を聞く
- ・～道行竈の好きなところや昔の話、日本酒プロジェクトについて、「非構造的インタビュー調査」
- ・聞いた話（歴史や想い）を模造紙にまとめ、発表することで住民に共有（①現地活動において）※下図参照
- ・②再訪問では、町が主催の懇話会（住民と職員が少数のグループで意見交換を行う会）に参加
- ・③最終報告会では、活動の振り返りと今後の提案等を、わかりやすく「紙芝居」形式で発表



3. 現地活動の成果

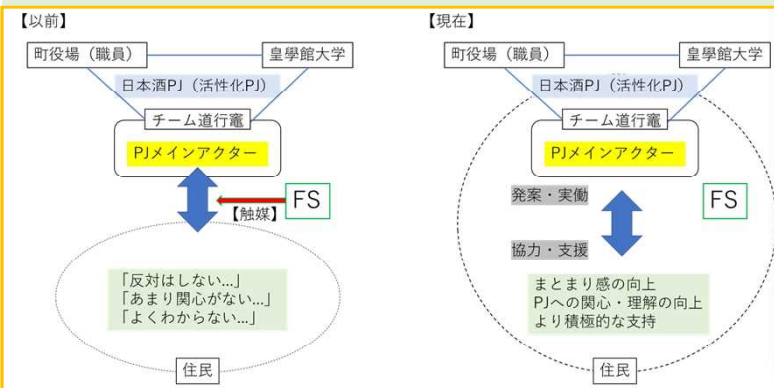
《成果》

- ・実際に住みながら親睦を深めていく中で、温かく迎え入れられる。
- ・合計25名の住民からお話を聞き、模造紙にまとめて住民に共有する。
- ・住民に聞き取りをすることで、普段考えないようなことを考え言語化するきっかけをつくる。
- ・出会い作業に参加したり、親睦会や報告会などを企画することで、住民が集まり会話する機会をつくる。



●集落のまとまり感・積極性の向上

●活性化プロジェクトをサポート・参加する雰囲気の醸成



【図：まとめ壁紙】

- ・道行竈の歴史等をまとめた「過去」、道行竈の好きなところ等をまとめた「現在」、進行中のプロジェクトやそれについての想い等をまとめた「未来」という3部構成でまとめた。
- ・現在も集会所の壁に貼られている。



4. 未来への提案

最終報告会において、メインアクターへの提案と住民へのお願いをした。最後に、一般化の可能性も示唆する。

《チーム道行竈への提案》

- ①お酒・お米・佃煮のセット（ふるさと納税の返礼品）
- ②コメの少量販売
- ③定期購買コースの設定
- ④遊漁船の停泊者をターゲットにすること
- ⑤チームの活動を住民にもっと頻繁に伝えること

《住民へお願い》

- ①これからも積極的に集まること
 - ②恐れずにいろいろな人（よそ者・若者）と関わること
- 《一つの可能性として一般化》
他の地域でも、外部者が住み込んでうまく立ち回することで住民がまとまっていくことは起こり得るのではないか。



課題: 「小さな拠点」を誰が、どう
つっていく?



背景
2年前から、スーパー、
コンビニの増進によっ
て、買い物に交通が不便
になったため、「小さな
拠点」を作る話が出た。
どのような機能が必
ず、どこに置く、誰が運営
していくのかといった一連
の問題が2年間続いて議
論をした。



調査結果

今、買ひ物の現状はどうなっている?
生協での注文、コミュニティバス、親戚に頼るなど、
買ひ物という課題をなんとなく乗り越えた。

買ひ物だけではなく、行政機能もある拠点を作るとし
たら、どこに置く?
元気海周辺のいいですね! 駐車スペースもあるし、平
地でアクセスしやすい。



買ひ物以外、拠点に必要な機能は?
行政機能、コミュニティ活動や交流の場としての機能
も。



提案: 住民が主体となって、「つくる」
という過程を楽しんでもらう

重要と感ずる点① コミュニティづくりの提案方
「つくるのが目標ではなく、『作っていい過程を楽しんでもらう』」

重要と感ずる点② 「人」と「組織」をうまく重ね合う

ワークショップによって、みんなを巻き込もう



住民による気づき



ワークショップによって、話し合いの場を設ける



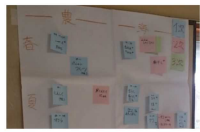
一緒に将来のビジョンをつくる



最初に取り組むべきことを決める



事例紹介



熊本市上通市通島

- ・ワークショップを通じて地域の課題が明らかに
- ・翌年、「直売所をやってみよう」と、ワークショップで話し合い
による決めで、自ら出品計画や運営方法を繰り返し話し



福島県金山町根田地

- ・ワークショップで、集落を歩いて資源や課題を点検をまとめる
「いいものがたくさんあるのだから直売所を作って売ってみようね」と
いう意見が多くあがった

これからの地域の拠点のあり方について ～松崎地区を例にとって～

大崎達也 東京大学法学部4年

1.課題

人口減少社会において魅力的な地方づくりには人と人が協
力して作り出す関係性が重要だと考えられる。
沿地区にある小さな拠点計画と松崎地区に既存の拠点と
ゆるりん館との連携から地域の活性化に必要なことを分析
し、「湯梨浜モデル」として将来に役立てたい!



松崎地区の拠点 ゆるりん館

2.調査の実施

計2回の現地調査を実施。第1回は湯梨浜のことを詳しく
知るため町内各地を訪問し、第2回は湯梨浜の現状を解決
する糸口を求めて鳥取県内他市町村を訪問した。

- 調査の結果、以下の2点に問題が絞った。
 - ・利用者の伸び悩み
足湯や食堂はあるものの利用者が多いとはいえない
→滞在する理由に乏しい?
→①普段使いしなくなる場所づくり
(地域内から目的)
 - ・財政的自立の達成
ゆるりん館単体での運営は今のところ赤字である
→もともとたくさんの方に来てもらいたい
→②わざわざ来なくなる場所づくり
(地域外からの目的)

3-1.提案①普段使いしなくなる場所づくり

普段使いしたい場所...居心地のいい場所。
→足湯や食堂に付随して、長居しなくなる仕組みを作る。

・ボードゲームや音楽という案もあるが、「多世代が」
「気軽に」という目的を加味すると、本をテーマにすること
を提案する。

<本×公共の事例紹介>

東京・根津駅のメトロ文
庫。市民が寄付した本が
自由に借りられる。
→自発的な参加が可能。
また、本棚そのものが施設
の象徴になりうる。

・FS長野県での事例。学生がおす
まのの本を選んで図書館に小
さな本棚を設置した。

→湯梨浜でも町立図書館と連携し
て実施が可能。テーマや運営人
を適宜変えて定期的に実施する。準
libに写真に似たコーナーもある。

3-2.提案②わざわざ来なくなる場所づくり

非日常の体験としてのイベントを想定。
予算の関係上大々的なイベントの実施は困難。
→既存の設備の活用。
→館内キッチンを活用した活動を推進
(原案のほかに町民の提案もいくつか)

- ・地域に必要なとされる場とするために地元産型の要素を
取り入れる

<具体的には>

- ・キッチンでの料理教室や
シェアキッチンの実施
講師は外部でも良いし、地元の
料理を作る回があっても良い
→おしゃべりして活動すること
そのものに重点を置く
- ・併設したマルシェの食材を使っ
た料理の提供
→会話がきっかけになりうる
- ・地域のことを体験して学ぶ場としての拠点の活用
も考えられる。(写真は松崎の名物いなり寿司を復
活させた際の様子)

〇前々ない普通さを魅力にするのも一つの手段。

4.まとめ

- ・足湯×本×料理 のように複数の要素を組み合わせて
「行きたい理由」を作り上げる
- ・地域のための施設なので地域で作り上げていく
その中で、距離感や貢献度の自由度一様々関わり方を共有させる
→みんなの意見を積極的に取り上げて反映していく

→施設の存在が、人と人との会話や情報の交換が行われる
みんなで作る町の掲示板のようなものになれるとよいので
は?



- ・滞在する理由があり、そこに
行けば人がいて、情報が得られ
る。でも、行くのは義務ではな
く必要とさなければいい。地域
の拠点の理想像としては江戸時
代の井戸跡会館が行われた江戸
のような場所が近いかもしれ
ない。

広域圏で打つべき 湯梨浜町の観光戦略



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻
修士課程1年 日隈壮一郎

湯梨浜町の掲げるテーマ

「生涯活躍のまち」に取り組む湯梨浜町の地域づくりと情報発信
が元々テーマとして存在

調査テーマの変遷

個人的な調査テーマを「羽衣地域における多世代間のコミュ
ニケーションの促進」としていたが、(写真)目現地調査を通じて
予想以上に車社会である実態から難しいと判断

元々町が掲げている「情報発信」を新テーマとすることに決定!

情報発信の重要性



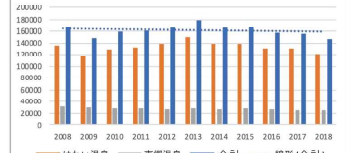
調査を通じて判明した湯梨浜の強み

①24%の関西、山陽滞在外国人が来日後宿泊込みの旅費決定



②グラウンド・ゴルフ国際大会Yurihama開催の実績

はわい温泉・東郷温泉の宿泊人員の推移



③温泉街レベルに於いて人が恒常的に来ている

④町内には多くの観光資源獲得する実跡が存在

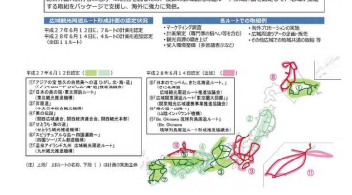
どうやって情報発信?

これからの時代:人口減・単独自治体での観光の維持は困難

提案を通じて知った「広域観光周遊ルート」

「色々観光光地の特色を生かし、広域で連携し、インバウンド
も増やす」という広域観光周遊ルートを生かして情報発信

広域観光周遊ルート形成促進事業



提案①

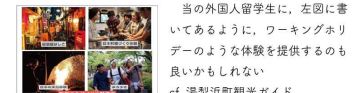


GGを訪訪に体験して
もらい、それを自由に
持ち帰ってもらう
→日本ユニシスらの観光型 MaaS 実証実験が採択し!

提案②

大学の生協などを通じて外国人留学生(特に中国人、韓国人)
にアタックし、彼らを窓口、彼らの知人に日本に来てもらう

そうすることで、2019年10月に廃止になった米子ソウル便の
復活や米子-香港便の便に繋がり得る。



当の外国人留学生に、左図に書
いてあるように、ワーキングホリ
デーのような体験を提供するの
も良いかもしれない
cf. 湯梨浜町観光ガイド

島根県松江圏域

神話・自然景観を生かした ナショナルツーリズムのメニュー化

尾崎まりあ・顧豪・土肥拓嗣・木村賢太

現地活動概要

目的

最終提言に向け、現状の観光コンテンツを実際に体験し、また地元関係者の皆様からお話を聞くことで、地域の実情をインプットすること。

活動日程

第1回現地活動：2019年8月6日（火）～ 2019年8月14日（水）
第2回現地活動：2019年8月24日（土）～ 2019年8月29日（木）
第3回現地活動：2019年11月29日（金）～ 2019年12月1日（日）
現地報告会：2020年3月5日（残念ながら中止）

現地活動を通して感じた地域の抱える課題

①

インバウンド誘客の遅れ

②

交通の便が悪い

③

「島根でなくてはいけない理由」が提供できていない

④

中心市街から郊外(美保関等)へ旅客が流れない

提案1：観光情報を発進する図書館

（対応する課題 ②、③）

・松江圏域は、古事記の舞台になったり、小泉八雲が住んでいたりと、文化的背景が豊富にあり、それらを活かした観光がしたい。⇒ **図書館の観光での利用**

・図書館の観光における4つの機能
「独特の建物・サービス」「時間潰し」「地元を活かした展示」「魅力の発信」

後ろの二つの分野については、神話や小泉八雲を活かして、周囲の文化施設との連携も取りやすい。ただし、これらのテーマはとっつきにくい印象を与えるので、観光客に対してインパクトのある（親しみやすい）アプローチが大切。また、島根県は交通が不便であり、移動が大変である。一箇所の観光地から得られる満足度を最大限にするため、図書館を利用し、各々の観光地において持つべき視点、見どころなどを事前に本などで触れておく。図書館職員のサポートを得つつ、独自性が高く知識背景の豊かな観光プランを立てることができれば、満足度は高いだろう。

提案2：体験コンテンツの充実

（対応する課題 ①、③）

・前提として…
昨今インバウンド観光客は「モノ消費」→「コト消費」を好む傾向に。

・現地活動を終えて…
地域の暮らし（伝統・慣習）そのものが魅力であり、特に神話は、島根でしか出来ないコトを提供できる唯一のコンテンツである！

そこで ⇒ 神話×体験コンテンツの強化

外国人旅行者にも「神話」に親しみを持ってもらうために…
例) ①美保関町にある十二の浦々をサイクリングコースに
②神話の伝説を伝えるカフェ（コミュニティ）

提案3：フотスポットの有効活用

（対応する課題 ①、④）

・若い女性の旅の特徴
①縁結びを目的にする観光客が多い。
②ツイッターやインスタグラムといったSNSが流行しており、写真の撮影及びSNSへの投稿を旅行の目的としている。

・2020年3月13日時点でのハッシュタグのついた投稿数は以下の通り
出雲大社（36.5万）、日御碕神社（5000）、八重垣神社（3.96万）、美保関（1.03万）、玉造温泉（5.29万）、由志園（3.09万）、水木しげるロード（7.32万）

⇒ **これらのスポットを連携させ、「縁結びエリア」として活性化させる。**

まとめ：FSを通して学んだこと

・旅について真面目に考えることができた。

・積極的にコミュニケーションをとる重要性を認識させられた。

・若者が触媒となってコミュニティ（地元の皆様が集まるきっかけ）を築くことの意義。

・地域の実情が把握できた。また、地元のために尽力されている方がたくさんいるということを学んだ。



高知県黒潮町

2019年 東京大学フィールドスタディ型政策協働プログラム
文科三類 佐藤英明、文科一類 前田悠輔

1、1年間を通じた活動内容

- 5-7月 現地調査に向けて事前調査
- 8月 8日間にわたる現地調査
- 10-2月 現地調査で見つかった課題について学内調査



黒潮町の中山間地域

• 中山間地域とは

平野の外縁部から山間地にかけての地域

高知県の全34市町村が有する
県面積の93%、県人口の39%
人口減少 (S35→H27 約47%減少)
農業産出額の約8割を占める
(高知県産業振興計画より)



4、課題に対しての提案

• 課題

- 打ち手が、短期的な解決策にとどまっている。
- 集落の行く末に、なんとなく危機感を感じてはいるが、はっきりしていない。
- 必要のない事業は、同意が得られない。(地区会長さん)

• 課題に対する我々の考え

集落の住民皆が、集落の実情を把握し、それに基づいた長期的な計画を策定することで、住民が、主体的に、一丸となって、課題を解決することが必要。

• 具体的な提案

- 鳥取県智頭町「ゼロ分のイチ村おこし運動」の応用
- T型集落点検の実施

2、現地調査について

- スポーツツーリズム
西南大規模公園 (サッカー・野球)
ゴルフツーリズム
- 防災
弱みを強みに変える取り組み
- 中山間地域
山積みの課題、住民の方々の思い



• 現在の取り組み

- 地元の方々の交流のサポート
→カフェをオープン。
→地区のお祭りやお風呂を使ったイベント等も開催。
- 珍しい体験型プログラム
→廃校になった校舎での宿泊、そば打ち体験などの実施。
- 野菜や惣菜等の販売
→バジルの販売やスポーツ合宿等へのお弁当作り。



タジラに通える町 ようこそ黒潮町へ！

• 鳥取県智頭町「ゼロ分のイチ村おこし運動」の応用

5つの柱：

- ①村の誇りの創造。②住民自治。③計画策定。④国内外との交流。⑤地域経営。
→計画策定の際には、外部の専門家の意見を取り入れる。
→実施にあたっては、地域の若者や、よそ者を活用する。

• T型集落点検の実施

集落の実情を把握するとともに、今後の課題を見出す。

• 最終的な効果

課題が山積する中山間地域において、住民が自ら計画を策定し、解決を図ることで、サービスの質の向上と行政の負担削減の、双方を実現することができる。

宮崎県美郷町



令和元年度フィールドスタディ型政策協働プログラム(FS)
 法学部4年 頃安美咲
 教育学部4年 前田智美
 新領域創成科学研究科2年 楊浩

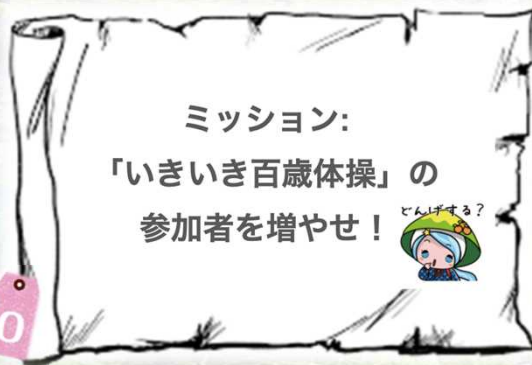


写真: 南郷鬼神野

美郷町について



【平成30年10月1日時点】

人口	4,994人
65歳以上人口	2,554人
高齢化率	51.1%
75歳以上人口	1,505人
後期高齢化率	30.1%

***県内トップの高齢化率！**



インタビューを踏まえて...

- ①家を出るまでの精神的バリア
Ex体操を必要と感じていない
- ②あるグループに入る精神的バリア
Ex既存の体操グループへの抵抗感
- ③公民館までの物理的バリア
Ex車など移動手段に困る

調査：町役場・町民インタビュー



調査結果 B. 町民ヒアリング



メッセージ

→①精神的バリアを克服するのが最優先

- ・自分の筋力の現状を知ってもらう
- ・対策を医学的に提供
- ・生き生き百歳体操の有用性を示す

提案「年1の検診で運動能力測定をする！」

測定

・“Timed Up and Go”テストのアレンジver.

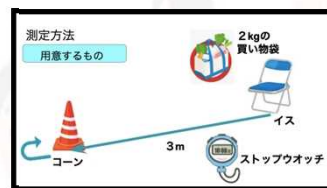
A. 1回目(通常版)

目的: 「立ち上がり」と「歩行能力」を見る。
→タイムを計る。

1. 椅子から立ち上がる
2. 3m先のコーンを折り返す
3. 再び椅子に座るまでの時間を計測

*「できる限り速く」歩いてもらう

<イメージ図>



B. 2回目(オリジナル版)

目的: 「持ち上げ」と「バランス」を見る。
→タイムは計らない(できるか否かの合否)

1. 2kgの買い物袋を持ち上げる
(持ち上がらなかった場合は重さを調整)
2. 持ったまま3m先のコーンを折り返す
3. 戻ってきて買い物袋を置く

*「ゆっくり自分のペースで」歩いてもらう。

メンバーで測定ビデオも作成！



結果

- ・4技能
歩行能力/立ち上がり/持ち上げ/バランス
- ・測定1
合否ライン: 13.5秒
- ・測定2
目視で総合評価

今回の測定でわかったこと
 ①立ち上がり
 ②歩行
 ③持ち上げ
 ④バランス
 ...測定した筋肉には大事な発達点があるんです！

カウンセリング

1)基準値と測定結果を踏まえて、4つの技能における「現状」を説明

2)「対策」を医学的に説明

「速筋」線維・「遅筋」線維の説明
 「速筋」線維の重要性の説明
 「速筋」線維の鍛え方の説明
 →「いきいき百歳体操」の有用性

3)必要に応じて「いきいき百歳体操」の会場の説明など

生き生き百歳体操の参加者増加へ！！

私はこのプロジェクトが単純な学習プロジェクトだと思っていました。あるいは、ただの旅かもしれないと考えていました。しかし、群山の奥の家に住み、地元の生活を体験し、地元の歴史を学び、地元の人々とさまざまな活動や交流をした後、私はこの場所と深く繋がっていると感じました。

美郷町はたぶんいつも私にとっては特別なところかもしれないかもしれません。未来はたぶんどこにいてもこの名前を聞いたら、過去の記憶は必ず、胸からの熱流と一緒に、私を連れて、あの夏に戻っていきます。

これこそ、このプロジェクトからもらった宝物だと思います。 楊浩

ここまで美郷町にハマるとは思いませんでした！
 勝手ながら第二の故郷だと思っています。
 この一年間の私たちの活動は東大の教授の方々、学生支援課、そして何よりも美郷町の方々の親切心と寛容さによって成り立っていたとつくづく思います。本当にどうもありがとうございました！
 前田智美

宮崎県美郷町を担当することになった日からの1年間、大変充実した日々を過ごすことができました。課題であった、生き生き百歳体操について深く学べただけでなく、美郷町の方々の温かさに触れて、町の魅力に浸ることができました。お世話になりました全体的にこの場をお借りして御礼申し上げます。 頃安美咲

2019 年度東京大学 FS プログラム @鹿児島県錦江町

教養学部文科一類1年 武藤彰宏
工学部都市工学科3年 深谷麻衣
工学部都市工学科3年 山田康祐

フィールド

鹿児島県錦江町宿利原地区

人口：456人
世帯数：246世帯
高齢化率：54.9%
主幹産業：農業 | 甘薯・干し大根・葉タバコ・畜産等
小学校：1校

※自治会でのコミュニティ活動が盛ん
(高齢者サロンの実施、大根やぐらライトアップ・やまんなか
スクールマルシェなどのイベントの開催)



課題・仮説

課題 1

車以外の交通手段が不足している…？
週一便のコミュニティバス
免許返納後の暮らしへの不安

課題 2

青パト隊の持続可能性
地域の見守り活動を行う青パト隊
ボランティア活動の一環
毎週火曜日に地区内をパトロール

仮説

自家用車を利用したライドシェアの
導入により、2つの課題は解決？
青パト隊を主体に、高齢者の買い物や
通院を支える移動手段として期待

夏現地活動

活動初日に町長・副町長へのご挨拶

意見交換会も実施。
現在の政策や今後の課題なども伺いました。

地元のイベントに参加

納涼大会では、準備をお手伝いし、舞台に立つ機会も！
グラウンドゴルフ大会にも参加し、グラウンドゴルフ
を教えてもらいながら親睦を深めました。
どちらも名前と顔を覚えてもらうチャンスに！
ヒアリングの際の話の種になりました。

ヒアリング調査

コミュニティバスの同乗、サロンへの参加、青パト隊や
移動販売車に同行など様々な方法での聞き込みを実施。
巡回診療所では利用者やその家族、医療従事者など、
多様な視点からの意見を伺えました。
他にもまちづくりワークショップへの参加やコミュニティ
ビジネス部会の見学を行い、地域の皆さんの地域への思い
を伺うことができました。



調査結果

サロン
免許返納や事故への不安

巡回診療所
セーフティネット /
車がないと行けない /
乗せる側の負担

移動販売車
バスとの併用 / セーフティ
ネット / 赤字でも運行

学内調査
自動運転技術だけでは問題解決につながらない
交通問題は移動の目的を踏まえて考える必要がある
運転をサポートする形での自動運転技術



コミュニティバス
セーフティネット /
賑やかな車内 /
コミュニティ形成の場

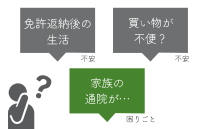
青パト隊
経済的な見返りよりも
地域貢献がモチベーション /
新メンバーが加入
→存続が見込める

コミュニティバスは
買い物、通院などが本来の目的
コミュニティ形成の場としての役割も
↑定時性があり「そこに行けば会える」

結論・提案

住みたい人が住み続けられるためには

主語を地域ではなく、自分として考えてみることは大切
地域の声として、不安と困りごとを混同していないか？

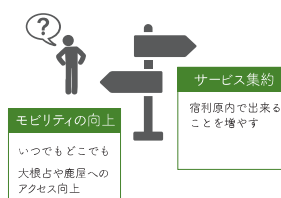


不安な人は利用者として見込めるか

事実、70代以上の42%が免許保有者。
不安を感じている人は多いが、現段階で新サービスを
導入してすぐに利用者になる人は少ない。
→2020年現在、バスを代替する事業としての導入は
需要が見込めない。

提案

青パト隊・公民館が主体となる地域内輸送の強化
現在は、地区合同サロン開催時のみ実施されているが、
拡張することを提案。具体的には、巡回診療所や
原田商店への送迎サービスなど。地域のイベントと
送迎をセットにすることが大切なのではないか。



現地活動を終えて

課題を解決するにあたり
優先順位をつけることの
大切さを学びました。
困りごと>>>不安
であり、不安に思うだけでは
利用には繋がりません。

また、地域内での情報共有の
難しさも実感しました。
地域の声をくみ上げる人は
いますが、その声は絶対では
ないし、推測であるケースも
あるように感じました。



学内調査

大口敬教授へのヒアリング

東京大学生産技術研究所次世代モビリティ研究センター
センター長の大口敬教授へのヒアリングを実施。
交通問題を考えるにあたっての足掛かりを掴みました。
現地報告会前に、課題を再設定する必要性を認識し、
数回にわたるミーティングを行いました。

春現地活動

実証実験の見学

肝属郡3町（肝付町・錦江町・南大隅町）合同で行われた
経済産業省「パイロット地域分析事業」に関する実証実験
を見学。生体認証を用いた決済方法でのデマンドタクシー
の可能性を検討しました。

現地報告会

合同サロンの参加者の皆さん向け、公民館や自治会、役場
の皆さん向けと2回に分けて成果を報告しました。報告会
の後には、発表に関する忌憚のない意見を伺う機会もあり、
最終報告に向けた手がかりを得ました。



今回の活動にご協力・ご尽力いただいた全ての皆さんに、この場を借りて御礼申し上げます。
本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願い申し上げます。